

教宣 せぶん

「トーナメント」と「リーグ戦」

先日の2週にわたる証人調べでは、この訴訟に懸ける私たちと会社の意気込みの違い、執念の違いのようなものをハッキリと肌で感じました。この違いは、「事実の証明」という点においても決定的な違いになってあらわれたものと思います。再三、指摘していますが、「準備書面」「陳述書」「証人調べ」などこの訴訟全体を通して、裁判官には、すでに「全体像」「本質」「切迫感」が確実に伝わったと感じます。

もちろん、この訴訟は、私たちにとって、「生活」や「雇用」や「顧客」を維持できるか、失うか、まさに人生をかけた真剣勝負です。負けたら次がない、言わば「トーナメント」です。一方会社側は、「メンツ」を懸けたたたかいなのでしょうが、「通知・提案」が実行されないからといって「経営」にはなんら影響を及ぼすものではありませんし、担当者の皆さんも「生活」が懸かっているわけではありません。数年経てば違う部署での仕事が待っているはずです。負けても次があるという「リーグ戦」の気楽さが見て取れます。目の前のたたかいを「トーナメント」として臨んでいる者と、「リーグ戦」として臨んでいる者の心意気の違いは、いずれ「結果」になってあらわれます。「リーグ戦」として臨んでいる者たちにも、やがて必ず負けられないたたかいが訪れます。この試合に負けたらこのたたかい自体にピリオドを打たれるという大事な一戦が必ず来ます。その時に、いままで「トーナメント」として臨んで来なかったツケがあらわれるでしょう。

私たちに必要なことは、目の前のたたかいに全力を傾けることです。次の試合のことは考えずとにかく目の前の勝負に勝つことです。負ければ「明日」はないわけですから、その試合にエースをぶつけ、その試合に一番調子の良い選手を使うことでしょう。経験を積ませる、教育の場にするなどという余裕はありません。気がかりなのは私たちの「スタミナ」ですが、体力・気力とも日を追うごとに増しているのではないのでしょうか。目の前のたたかいに全力を尽くし、それが形になってあらわれていくことで、気力・体力がリフレッシュされ、「もっとできることはないか」というムードが漂ってはいないのでしょうか。精神的・体力的なスタミナは、その行動に手ごたえを感じることで、消耗されるのではなく新たに湧き出てくるものだと思います。各地で行なわれている抗議行動やピラ配りを例に取れば、先頭に立っている者ほど次の行動はどこでやろうかという発想が湧いてくると言います。汗を流せば流すほど「次はあそこでやりたい」というイメージが出てくるそうです。組織全体がそういうムードに包まれれば、このたたかいの差はもっと、もっと歴然としてくるでしょう。「リーグ戦」でたたかっている者たちが、気がついて「トーナメント」にシフトし直しても、その時にはすでに「手遅れ」な状況に、このたたかいをリードしておきましょう。